

寺田寅彦と親しかった津田青楓の 懶畫房のことなど雑感

千葉 明

寺田寅彦には「寺田寅彦画集」⁽¹⁾が出版され、寅彦の絵の愛好家も多いことと思われる。山下一郎はこの画集で詳しい解説をしているし、又寺田寅彦全集でも「寅彦と絵画」⁽²⁾という解説を書いているが、それ等の中に時々津田青楓という名前が出てくる。寅彦には青楓についての強い思いを語った文もあるが⁽³⁾、今回は青楓から見た寅彦像から話題を進めたい。

1. 青楓と寅彦

津田青楓は夏目漱石や寺田寅彦と交流の深かった多分唯一の画家で文人としても知られている。青楓が漱石や寅彦について書いた本としては「漱石と十弟子」と「寅彦と三重吉」が良く知られているが、ここでは同じ青楓の著書、「懶畫房草筆」⁽⁴⁾に書かれている「寺田寅彦博士」から話を進める。ちなみに青楓は長寿で、自伝的著書⁽⁵⁾も多く出している。

まずその「寺田寅彦博士」のさわりを抜き書きしてみる。（現代かなづかいに直した）

寺田さんは中々神経のこまかい人だった。「ミ、ズの腹わたでも一生研究する価値がある」、そんな風なこともよく云っておられた。私は漱石先生の歿後よく寺田さんを訪問した。画家というものはいろんな周囲の出来事や、又世間との関係で、まるきり画がかきたくなくなることもある。なにをみても興味を感じず、画に興味をもてなくなる時が往々ある。つまり芸術意慾の貧困とでも云うのだろう。

私が寺田さんを訪問するのはそう云う時が多かった。尤も寺田さんは芸術、学問だけでなく、世間話もできる人で、又世間のことに對しても諧謔まじりの皮肉で批評をされるところが面白い、時にとっては溜飲を下げることさえある。

然し寺田さんはどちらかと云えば人一又は芸術文学に對しても、短所より寧ろ長所の方を見られる性の人で、私なんかは短所や欠点や、又厭味たらしい新物に對してはすぐ反感を起して、その中から長所を見出すことを忘れてしまうが、寺田さんはどんな変なものでも一応咀嚼される、然る後胃の腑におさまらなければ、吐き出される式だ。

寺田さんを知ったのは随分古く、夏目先生の紹介によるのだが、漱石先生から私へ貰った手紙を見ると、「寺田けふはヒュザン会を見に行つて高村光太郎の画を買つて来た」とか云うような報告がある。

その頃から漱石門下の画の好きな一人としてよく話や手紙で先生からきかされていたので、いつの間にか知るようになった。

(略)

ところが寺田さんとなると科学者の画好きと云うので、どの程度の理解があるのか見当がつかなかった、その頃のヒュザン会と云うのは齊藤興里と岸田劉生や高村光太郎が会員で、当時錚々たる新人であり、又最新の新物揃いだった。そこから高村君の画を買ってくる人だから相当新物喰いだと思っていた。

私はその頃新物もいいが、アカデミックの教養を経ない新物はこまるという信条が強かった。

高村君の、卓上の花瓶に白いつまじかなにかの花が思い切り絵の具を厚くもりあがらせた八号位の画が、応接間のピアノの上に置いてあるのをよく見かけたが、私が寺田さんへ行くようになってから、一度もその画についての私の意見又は批評を求められたことがないように記憶している。津田君はこんな新しい画は解るまいと思っておられたのか、それともその頃はもう自分の芸術観の段階が進んできて、昔の眼でみたものを今更意見をもとめてもしょうがない、とされていていられたのかも知れない。

そんなことで幾分寺田さんの芸術観に不可解なところがあり、又進んで接触すれば新しい芸術観に眼をひらかされるような気もしていた。

(略)

そんな訳で最初はなんとなくしっくりしなかったが、私の考え方も素直に云い寺田さんの話も屢々聞いているうちに段々両方で接近するようになった。

それに寺田さんは専門の科学の学問と同様ヨーロッパの新しい芸術の理論の本を片っぱしから丸善で買って来て読んでいられたので新しいものはなんでも知っていた。

(略)

このように青楓は寅彦の絵そのものに対する批評ではないが、寅彦の絵画に対する関心の高かった事を画家の眼で見て書いている。

2. 青楓の懶畫房について

ところで青楓の著書の「懶畫房草筆」についてであるが、この懶の字が話題の始まりである。この書名は手元にある本を見ると箱書きも本の表紙も毛筆の草書体で書かれていて私には判読出来ない。しかし本文の中の活字を見ると確かに懶である。同じ青楓の「春秋九十五年」にも「懶画房草筆」を昭和16年中央公論社より出す」と書かれている。ところが青楓の作品を多く所蔵することで有名な山梨県一宮町立青楓美術館（現笛吹市立青楓美術館）発行の図録⁽⁶⁾の中にある津田青楓著作一覧には、「懶画房草筆」中央公論社昭和16年3月（1941）と書かれている。つまり「懶」の字が「懶」になっている。私は青楓の画房名は「ランガボウ」だと思っていたが、青楓記念館の人は「ラン^イガボウ」と言っているとの事であった。

これはこれとは思い改めて漢和辞典で調べる事にした。すると角川漢和中辞典⁽⁷⁾では、「懶」心部16画、ラン、ライ、「懶」と同じ、とあった。つまり字の右の頁は頁でも良い

というわけである。しかし固有名詞の正式な読み方が「ラン」でも「ライ」でも良いというわけにはいかないだろう。そこでさらに別の漢和辞典に当たってみた。郁文社の漢和大辞林⁸⁾で明治の発行本である。これによると、「懶」心部 16 画、ラン、おこたる、なまける、ものうし、「懶」心部 16 画、ライ、きらう、嫌、とあり、さらにこの両字は右が頁と負であり互いにとり違えてはならぬ、とあった。つまり明らかに両字は異なるのである。

これで私は青楓の自伝風の著書からみても青楓の好むと思われる画房名は「懶画房」であり、「ランガボウ」が正しいのだと思った。

しかし、そう思ったにしても実際に青楓本人が「ランガボウ」と呼んでいたという証拠があるかということになりはたと困った。

ところがこれに思わぬ助け舟が入った。それは手元にあった古雑誌「銀花」40号⁹⁾である。この中に林要の「人間・津田青楓」という文があり、その中に次のように書かれていた。

懶の青楓

「^{らん}懶青楓は君には不似合だね」

長谷川如是閑翁が言いました。敗戦後間のない桜のころ如是閑、青楓、正宗得三郎を伊豆の葦山にお誘いした時のことです。

(略)

このように懶の字にらんとルビがふってあった。これは青楓が同席している時の話であるから間違えようがない。これで一件落着。

何しろ古い本の話でもあり事を明らかにするのに大分手こずったのであるが、ようやく解決を見たという古い本好きの人間の話であるが、一般にはどう書かれ、どう読まれているのだろうか少し気になるところではある。

なお、青楓は「懶畫房草筆」の中で寅彦に関する文をこの他に「寺田さんと畫」を載せているし（「科学ペン」¹⁰⁾初出）「思想」¹¹⁾の「寺田寅彦追悼号」では、「寺田さんの忍苦」という文を10頁にもわたって書いている。

なお私が津田青楓に対する関心を強くしたのは大森一彦氏によるところが大きかった。

(追記)

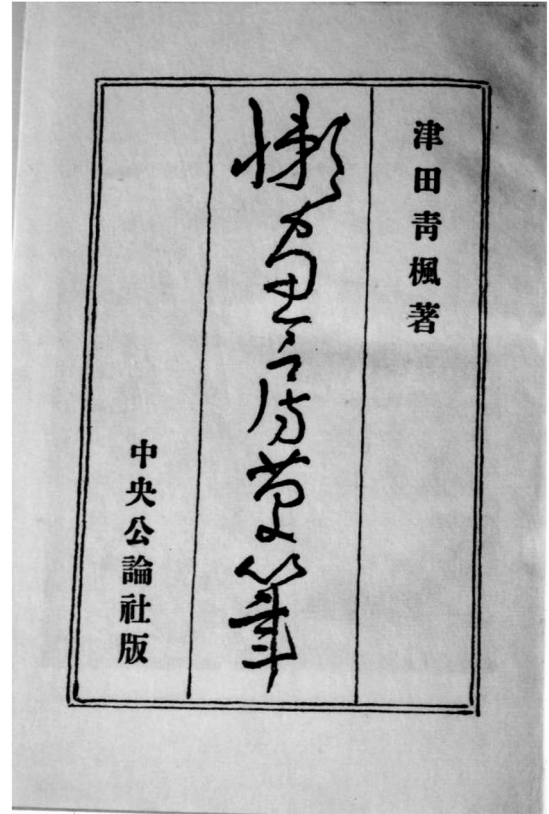
全くうかつなことであったが寅彦が青楓の事を書いた文に「懶是眞」¹²⁾があった。ここでは「懶」でなく「懶」を使っている。しかし寅彦は青楓が何故懶を使ったかを考察したところでは、まさしく先に述べた「懶」の字の意味で使ったのだらうと推察している。さて寅彦は本当に懶と書いたのだろうか。そして何と読んだのであろうか。なお青楓は「春秋九十五年」の「自作年譜」には『大正十年七月、中央美術に寺田寅彦「懶是眞」と題し津田青楓論を執筆す』と懶の字に直している。いささかくどい文になってしまった。

(脚注)

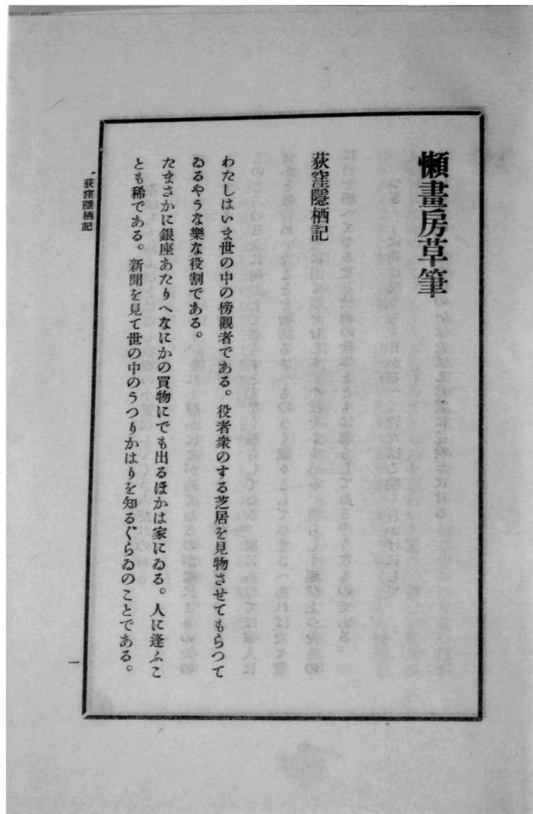
- (1) 「寺田寅彦画集」(普及版) 昭和 60 年 11 月 15 日、中央公論美術出版
- (2) 「寺田寅彦全集」八巻 1997・解説 山下一郎 岩波書店
- (3) 「寅彦の青楓論」例えば「津田青楓の畫と南画の芸術的価値」は「寺田寅彦全集」
文学篇 第一巻 昭和 11 年 9 月 25 日 岩波書店
- (4) 「懶畫房草筆」 津田青楓 昭和 16 年 3 月 23 日 中央公論社
- (5) 青楓の自伝的著書 例えば
 - (イ)「老亀半生記」昭和 31 年 9 月 7 日 南画廊
 - (ロ)「老畫家の一生」昭和 38 年 8 月 20 日 中央公論美術出版
 - (ハ)「春秋九十五年」昭和 49 年 1 月 15 日 求龍堂
- (6) 「一宮町立青楓美術館図録」2001 (現笛吹市立青楓美術館)
- (7) 「角川漢和中辞典」 小野忍 藤野岩友 貝塚茂樹 編 昭和 34 年初版 昭和 56
年 1 月 20 日 194 版 角川書店
- (8) 「漢和大辞林」 郁文舎編輯所編 芳賀剛太郎増補訂正 明治 39 年 5 月 26 日初
版 明治 43 年 1 月 30 日増補訂正発行 郁文舎
- (9) 「銀花」40 号 昭和 54 年 12 月 20 日 文化出版局
- (10) 「科学ペン」昭和 12 年 12 月号「回想の寺田寅彦 吉村冬彦」に初出 科学ペン
クラブ
- (11) 「思想」166 号 「寺田寅彦追悼号」昭和 11 年 3 月 1 日 岩波書店
- (12) 「懶是真」寺田寅彦 寺田寅彦全集 文学篇 第十八巻 1987 年 1 月 9 日 2 刷
初出は大正 10 年 7 月 中央美術



「懶畫房草筆」箱の題字



「懶畫房草筆」の標題紙



「懶畫房草筆」1頁



青楓の「漱石と十弟子」のさし絵